

Title	大阪市立大学における人文系学生向け実験授業の軌跡
Author	水野, 寿朗
Citation	大阪市立大学大学教育. 19 卷 1 号, p.16-21.
Issue Date	2022-03-31
ISSN	1349-2152
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学大学教育研究センター
Description	
DOI	10.24544/ocu.20220318-016

Placed on: Osaka City University

■ 報告

大阪市立大学における人文系学生向け実験授業の軌跡

The rise and fall of experimental classes for liberal arts students in Osaka City University

水野 寿朗
大阪市立大学大学院理学研究科

MIZUNO Toshiro
Graduate School of Science, Osaka City University

キーワード：実験教育、科学教育、体験型学習、分野横断型科目

Key Words: Experimental education, Science education, Experiential Learning, Cross-disciplinary courses

抄録

大阪市立大学で人文系学生むけに開講されてきた一連の自然科学系の実験科目が、28年間にわたる歴史を閉じることになった。〈文系実験〉と呼ばれたこれら3科目について、筆者が分担教員や科目代表として関わった時期を中心として主に運営面の変遷を概観した。またこれまで提供されてきたすべての実験・実習テーマの記録を一覧として添えた。

大阪市立大学では総合教育科目の中で人文系学生むけに自然科学系の実験科目を開講している。これまでに3科目が開講され^[1]、この風変わりな科目は分担教員らに〈文系実験〉の愛称で呼ばれてきた。2022年度の大学統合による大阪公立大学への移行にあたり、〈文系実験〉は後継科目を作らず終了する運びとなった。

図1に〈文系実験〉3科目の開講時期と履修人数の推移を示す。「実験で知る自然の世界（1994-2005年度）」が最初の科目で、「実験で知る自然環境と人間（2004-2012年度）」が姉妹科目として続き、その後「体験で知る科学と技術（2016-2021年度）」が後継科目として現れた。これら3科目は理学部教員の主催で自然科学志向が強いこと、オムニバス形式でほぼ毎週教員が交代すること、実験テーマは概ね分担教員の好みに任されているなど、いずれも良く似た実施形態である。また筆者の知る限り、これら3科目の運営方針は同一の場で決められていた。本稿では、全学共通教育における実験教育の縮図とも言うべきこれら3科目を一体の〈文系実験〉として捉え、時代を10年ごとに区切り、前期、中期、後期の三期について運営の変遷を概観する^[2]。

前期（1994-2003年度）

「実験で知る自然の世界」立ち上げの様子は初代科目代表による詳しい解説がある（木野,2005）。同科目は1994年度、旧教養課程から全学共通教育への再編を契機に、「広い視野と総合的な判断力の育成」に見合う新しい科目として構想された。開講当初、教員らは実験テーマを用意するにあたり、人文系むけにばかり内容を考えるのではなく、理工系むけ基礎教育実験の内容を基に簡略化したという。理工系学生が履修すると他科目と内容が被るため、理工系むけの開講は意識的に避けられた。結果的にこの判断が迅速な新科目立ち上げに繋がると同時に、〈文系実験〉という科目の性格を決定づけたと思われる。

本科目の開講には実験施設の有効活用も視野にあった。同時期に施設整備の一環として基礎教育実験棟が竣工し、実験授業の環境が劇的に改善された。同棟には当時5名の技術職員が常駐する一方で、分担教員らの研究室はやや離れた理学部棟にあったため、授業の準備や運営に技術職員が大きな役割を果たしてきた。

同科目の2コマ授業で3単位という特殊な単位数は、授業の進め方を講義1コマ（2単位）・実習1コマ（1単位）とするコンセプトの反映であった。実習

テキストは黎明期から半年分の内容を事前に手製本して配布されており、学生の予習にも十分に配慮されていたことがわかる。初回ガイダンスでは基礎教育実験棟全体の見学が行われ、建物を核として科目をまとめようとする意図が読み取れる。また科目代表は自分の分担回での人文系学生むけとしての工夫や、分担教員の意識をまとめるための情報交換にも積極的だった様子である。ただし、例えば個々の実験テーマと自然科学全体との関わりを議論するまとめ回といったものは、少なくともシラバス上では確認できない。成績評価の方法を見る限り、恐らく当初から科目全体としてテーマの「寄せ集め」を越える仕掛けは無かっただろう。成績評価は平常点を中心とし、レポートはどれか1回分の提出のみで良いとされた。この評価方法は中期の終り頃2012年度まで続いた。履修者数は抽選のかかる年もあり好調に推移している（図1）。

なお同科目は講義中心の総合教育科目の科目群「自然と人間」に収まっていたにも関わらず、テーマの授用に加えて基礎教育実験棟で行われる都合からも基礎

教育の科目群「基礎教育（実験）」の影響下にあった^[3]。そのため〈文系実験〉は、開講科目数や予算管理を行なう各科目群の教科会議の枠組みや、講義と実習の授業区分に関して当初から曖昧な立ち位置にあったと言える。

中期（2004-2013年度）

2004年度からの新科目「実験で知る自然環境と人間」は単なる「～自然の世界」の姉妹科目ではなく、全学部むけで理工系学生も受講できた。よって同科目は実のところ〈文系実験〉ではない。本来であれば履修できる学部の違いをふまえ、両科目間に異なるコンセプトを持たせなければいけないはずだが、実際は単位数の設定から授業デザインにいたるまで、「～自然の世界」の流用である。このことは両科目間でテーマの重複があることから分かる。「前期」の項で触れたように対象として避けてきたはずの理工系学生を、なぜあえて含めたのだろうか。当時の履修案内をたどると、「自然と人間」科目群は1998年度に人文系むけと全学部

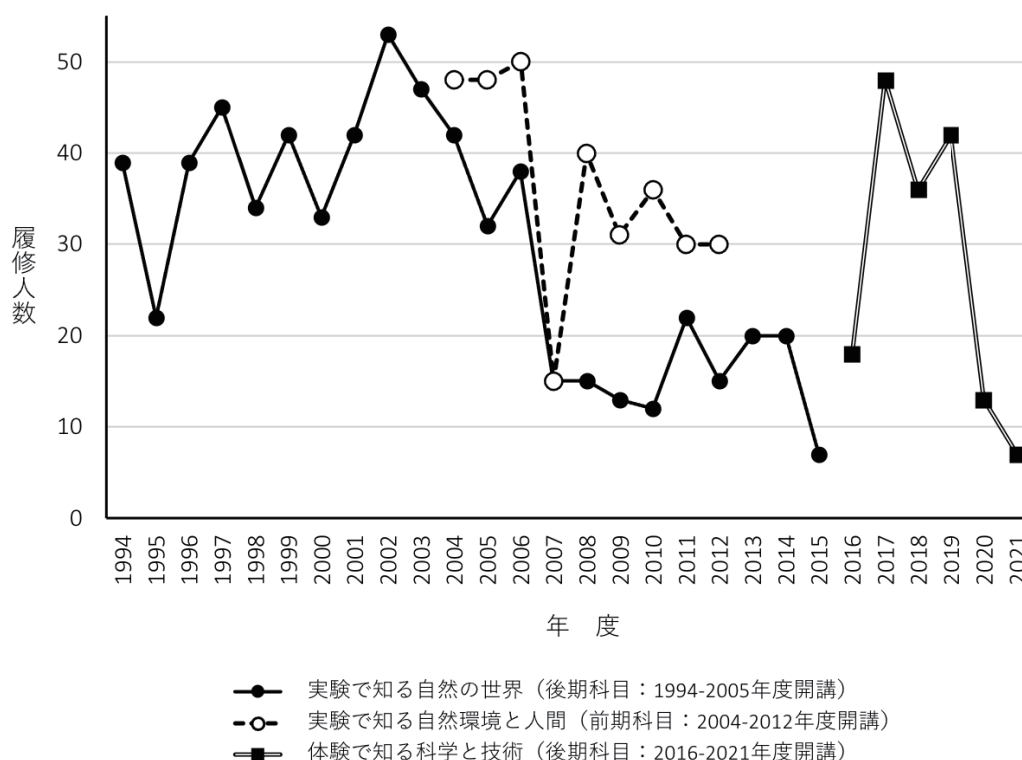


図1 〈文系実験〉3科目の開講時期と履修人数の推移

「実験で知る自然の世界」と「実験で知る自然環境と人間」は2コマ3単位、「体験で知る科学と技術」は2コマ4単位。「実験で知る自然環境と人間」は他2科目と異なり理工系学部生も履修できた。履修人数はいずれも原則48名を上限として超える場合は抽選とした。2020-2021年度のみ人数の上限を18名とした。

むけの二枠に再整理されており、これら枠組みのバランスに配慮したのかもしれない。この判断に先立ち、理工系学生向けの基礎教育科目との内容重複や、人文系と理工系の実験技量の違いからくる授業進行の難しさについて、一定の認識があったことは確かである（木野,2005）。しかし関係者がこれらの問題について解決の見通しを持っていたのかどうかは判然としない。

同一の学生が両科目を受講することは認められなかった。外向きの理由としては人気科目となっていた〈文系実験〉の抽選を緩和することであろうが、それだけが開講の動機なら、最初から同名の科目を2クラス設ければ済む話である。内向きの理由として、理工系学生を含む新科目を設けるべき事情が先にあり、その目的に合わせて実験テーマを重複させてでも、迅速に開講せざるをえなかったのだろう^[4]。なお「～自然環境と人間」開講当初に重複するテーマは2テーマだったが、休講直前（2012年度）には5テーマまで増えており（表1）、テーマの重複を許したことはかえってテーマ数やその提供者を減らす誘因になったように見える。中期のテーマには数学科からの提供があるのが大きな特徴である（表1）。

以降は筆者の経験（2008年～）を中心に述べる。当時筆者は「講義1コマ・実習1コマ」という授業デザインの要求を受けなかったため、3単位の意味付けはすでに形骸化していたようである。また少なくとも筆者の周囲の教員はみな2科目とも〈文系実験〉という認識であった。初回ガイダンスから科目統合の象徴たる実験棟見学メニューは消滅し、遅くとも2007年度に安全教育（消火器訓練）に変更されていた。同じ時期から人文系学生の履修が急減しはじめ、「～自然環境と人間」は理学部クラスの様相で、〈文系実験〉は迷走しているように見えた。「～自然環境と人間」の人文系履修者の少なさは分担教員の不興を買い、履修人数としては「～自然の世界」より常に多かったにも関わらず（図1）、2012年度限りで休講となった。

後期（2014-2021年度）

〈文系実験〉は1科目に戻ったものの人文系学生の戻る気配に乏しく（図1）、さらに休講にする選択もありえたが、結局は科目の再興が探られることになっ

た。教科会議や授業区分の枠組みにはまらない立ち位置に加え、科目立ち上げ当時に初代科目代表の牽引力が大きな役割を果たしていたためか、この時期の〈文系実験〉には科目代表が趣味的に開講しているとの誤解さえも生じており、二代目の科目代表は苦しい立場にあったはずである。開講を継続するにはルーチンワークで誰でも運営できる体制に切替える必要があった。

授業内容について、少ない単位数の不利益をも超えるだけの魅力とは一体何だったのだろうか。レポート1回分のみのルールは変わっておらず、少なくとも人文系学生については評価のゆるさで誘惑されていたとは考えづらい。魅力の低下に関して中期終盤の実習テキストの状態は象徴的である。学生は1科目しか受講できないのにテキストは2科目分の内容を区別せずに載せた合本形式で、1科目休講後もそのまま使われ、冊子在庫を消費しきる前に予定のテーマは入れ替わり、半分のテーマは使われないまま追加テーマのプリントが配られていた。

2014年度に筆者が三代目の科目代表を引き継ぐことになり、翌年度にかけて以下の取組を行なった。①開講の是非を判断する責任は「自然と人間」教科会議にあることを会議の場で確認する。②科目代表は理学部学科間で2年毎の輪番制とする。③テキストは速やかに改訂し、刷り溜めをしない。④ガイダンスで基礎教育実験棟全体の見学メニューを復活させる。⑤レポート1回分のみのルールをやめ、すべての回で個別に評価をして成績を集計する。

さらに2014年度の教科会議議長（二代目科目代表）と連携し、3単位から4単位への変更を画策した。ところが同一科目のまま単位数を変更すると単位認定業務に支障が出るため、新たな科目として開講しなおす必要が生じた。幸い、教科会議はこれを科目の役割を考え直す好機と捉え、新科目の方向性について次の議論がなされた。①全学共通教育科目らしく、理学部教員以外も参加しやすい趣旨を掲げること。②同様の理由で、必ずしも自然科学中心でなく、応用科学や工学にも裾野を広げること。③同様の理由で、基礎教育実験棟ばかりに拘らず、他の学内附属施設の活用も視野に入れること。④狭義の実験教育に拘らず、体験型科目の視点で見学中心といったテーマも許容すること。

以上の議論をうけ新科目の名称は「体験で知る科学と技術」とし、2016年度から開講することになった。実際には大部分のテーマを「～自然の世界」から引き継いだ。この機会に大学教育研究センター教員や外部非常勤講師が参加する流れとなった。ただ2015年度の教科会議議長が交渉に尽くしたものの、期待されたさらなる他学部教員の参加は実現しなかった。履修者数は2017年度から明らかに持ち直し、再び満員の年度も出てきた。

しかし2019年度の「自然と人間」教科会議の判断で、〈文系実験〉の開講は2021年度限りとなった。新大学キャンパス（森之宮）の施設計画にまだ不明な点が多く、また多くの教員は杉本キャンパスから通いで授業を行う必要があり、実習室環境の不透明さから〈文系実験〉の開講は困難と判断された。基礎教育実験棟以外の附属施設と協力する機会は巡ってこず、科目名にある「技術」の観点も前面に出なかった。さらに2020年初頭からの新型コロナウイルス感染症対策を受け、〈文系実験〉は厳しい人数制限で対面開講にこぎ着けたものの、履修者数はその上限に満たず最終年度を迎えることとなった。

おわりに：〈文系実験〉の教育目標について

本学の〈文系実験〉が開講された1994年当時、人文系学生むけの実験科目は全国的にそれほど例の無いことと当事者らに認識されていた（木野,2005）^[5]。近年、人文系向け実験科目の開講事例の報告が続いており、科学教育への社会的理解が進む流れで評価を高めている^[6]。本学の〈文系実験〉は、開講当初のシラバスでその主題と目標について「身近なテーマの自然科学実験を通して自然の世界に親しむ」と謳ったが、この文言は現在「基本的な実験・実習を通して自然科学と技術に親しむ」と形を変えて引き継がれており、「親しむ」ことを一貫して目標に掲げてきた。後期の新科目名で意識された「体験」型授業もいわば親しむ形の一つにすぎない。もし人文系むけの実験教育に対し、このような牧歌的な教育目標ではなく、より意識的な科学リテラシーの涵養や促成といった効果が求められているなら、本科目の閉講は時代の流れかもしれない。

注

- [1] 「実験で知る自然の世界」および「体験で知る科学と技術」について、商学部・経済学部・法学部・文学部・生活科学部人間福祉学科・医学部看護学科。人間福祉学科は1997年度から、看護学科は2010年度から履修案内に明記された。「実験で知る自然環境と人間」は全学部履修可能であったが本稿に含める。また本文では科目名を適宜「～自然の世界」「～自然環境と人間」と省略した。
- [2] 筆者は2008年度から一分担者として「～自然環境と人間」に参加しはじめ、2014-2015年度の「～自然の世界」科目代表者を務めた。
- [3] ちなみに2021年度現在の両教科会議がもつ教育授業予算を比較すると、全教科にしめる割合は「基礎教育（実験）」が65%のところ、「自然と人間」はわずか1%である。〈文系実験〉に必要な設備や消耗品のほとんどは実験棟の予算、すなわち基礎教育（実験）の予算無しには成り立たない。
- [4] この時期、大阪市大は〈文系実験〉を文部科学省の「特色ある大学教育支援プログラム（特色GP）」へ応募させており、提供科目の充実を図る必要があったのかもしれない。
- [5] 実際には慶應義塾大学で早くも1949年頃から人文系学生むけの実験教育が行われていた（青木,2002）。同大学は大規模な人文系むけの実験教育課程を持つことで知られ、2005年度の特徴GPに採択されており、各実験テーマの詳しい内容が公開されている（慶應義塾大学日吉キャンパス 特色GP 文系学生への実験を重視した自然科学教育 <https://www.sci.keio.ac.jp/gp/5B027176.html>）。
- [6] 東北大学の例として須藤（2009）、大阪大学の例として山口・堀・廣野・杉山・常木・井上・山成・窪田（2013）。東北大学も慶應義塾大学と並んで2005年度の特徴GPに採択された。

引用文献

- 青木健一郎（2002）,「文科系学生が学ぶ物理学実験」,『大学の物理教育』,2002-3巻,32-35.
- 木野茂（2005）,『大学授業改善の手引き - 双方向型授業への誘い -』,ナカニシヤ出版.
- 須藤彰三（2009）,「文科系のための自然科学総合実験の開講」,『東北大学高等教育開発推進センター紀要』,第4巻,187-198.
- 山口和也・堀一成・廣野哲朗・杉山清寛・常木和日子・井上寛・山成数明・窪田高弘（2013）,「文系学生向け自然科学実験の授業開発 - その重要性と問題点 -」,大阪大学高等教育研究,第1巻,33-40.

大阪市立大学における人文系学生向け実験授業の軌跡

年度 (西暦)	1994	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010
本文中の時期区分	前期										中期						
科目代表	木野 茂										飯尾英夫						
実験テーマ	履修者数 (○前期 ●●後期)																
乱数の発生 / 乱数の応用 (2004-06) でのための数学 (1)確率編 (2)統計編 (2010-11)	●39	●22	●39	●45	●34	●42	●33	●42	●53	●47	○48 ●42	○48 ●32	○50 ●38	○15 ●15	○40 ●15	○31 ●13	○36 ●12
身近な確率の話 (1)モンテカルロ法 (2)勝ち負けの流れ (2012-13)											●●	●●	●●				●●
石鹸膜・シャボン玉の数学 (2007)														●●			
電卓であそぶ (1)大きな数 (2)素数のふしぎ (2008) 電卓を使った数学の実験 [全2回] (2009)															●●	●●	
日常生活と数学 (1)暗号理論 (2)幾何学の歴史 (2014-2015)																	
放射線を測る (1994-2012)	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	○	○	○	○	○	○	○
地球の重力加速度 (1994-2021)	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
楽器と声の音波 (1994-2021)	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
平面を覆う正多角形のタイルの図形は3種類しかない (2009-2014)																○	○
プリズムを通してみたLEDの光とブラッグ定数 (2015-2019)																●	●
捕食者・被捕食者の数理モデル (2020-2021)																	
気体分子運動 (2004-2006前)											○	○	○				
ブラウン運動 (2006, 2016-2021)													●				
運動方程式を解く：表計算でシミュレーション (2007-2008)														○	○		
化学発光<ルミノールとシュウ酸エステル> (1994-2003)											○	○	○	○	○	○	○
生物発光と化学発光 (2004-2017)	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
天然色素と人工色素 (2004-2006)											○	○	○	○	○	○	○
身の回りにおける色素の謎を探る (2007-2012)																	
シャボン玉の科学 (2011-2015)																	
医薬品の活性成分<解熱剤からアスピリンの単離> (1994-2001, 2004後, 2005後, 2006, 2008-)											○	○					
アスピリンの重鉛錯体 (2004前, 2005前)	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
外部刺激応答型分子 (2005-2007)																	
金属錯体のクロモトロビズム (2018-2021)													●	●	●		
地球温暖化・温室効果ガス、二酸化炭素分子の不思議 (2002-2013)											○	○	○	○	○	○	○
二酸化炭素(CO2)の性質 (2016-2021)									●	●				●	●	●	●
分子の宝石 (2004, 2006-2012)											●		○	○	○	○	○
くらしと微生物 (1994-2000) バイオポリマーの機能 (2004-2006)											○	○	○	○	○	○	○
色で見分ける線菌パワー (2007-2012)	●	●	●	●	●	●	●										
植物の形態とフラクタル (1994-1995, 1997-2015)	●	●		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
植物の生き方とくらし [実質は酵素実験] (1996)													○	○	○		
細胞分裂のメカニズム (2001-2003) 花粉の形態と花粉管発芽 (2006-2008)			●					●	●	●							
自分の体内時計 (2004-2005, 2007, 2010-2012)											○	○		○		○	○
植物の光周性 (2009)																	
DNAとRNAの抽出 (2002-2021)									●	●	●	●	●	●	●	●	●
顕微鏡による植物細胞の観察 (2016-2021)																	
ニワトリの発生 (1999) ニワトリの胚発生 (2014-2021)															○	○	○
動物のからだ (2008-2012) [実質は淡水プランクトン観察]							●										
都市環境と昆虫 (1994-1998, 2000-2001, 2004-2006)												○	○	○	○	○	○
都市環境とセミの生活 (2007-2012)	●	●	●	●	●		●	●									
キャンパスの植物で探る陸上植物の進化 (2016-2019)																	
植物の構造 (2020-)																	
古生物の変遷からみた地球環境 (1997-1998)																	
植物化石と現生植物からたどる植物の進化 (2021)				●	●												
河床および海浜の礫の形状 (1994-1996)																○	○
河原の礫と海岸の礫 (2003-2005, 2009-2012)	●	●	●								●	●	●				
気相法によるダイヤモンドの合成 (1997) 結晶と偏光 [結晶の干渉色] (1998)																	
地球を構成する岩石・鉱物 (1999-2002) 偏光で見る自然 (2011-2018)																	
地形図と地質図の読み方 (1994-1996) 空中写真で見る地形と地質 (1999-2006前)											○	○	○				
活断層を探る (2006後-2007) 空中写真から読み取る活断層 (2011-2021)	●	●	●								●	●	●				
3Dで診る都市の地形 (2007)																	
3Dで診る【東京/大阪】の地形 (2008-) 【東京は前期、大阪は後期】														●	●	●	●
火山噴火と災害 (2005-2008)												○	○	○	○		
大阪平野の古環境 (2019-2021)																	
環境の中の水 pHとCOD (1994-1998)												○	○				
おいしい水の話【陸水の化学成分組成】 (1999-2010)	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●			●	●	●	●	●

表1 歴代テーマ一覧表

1994年度から2021年度までに〈文系実験〉で提供された実験テーマを示す。符号●は「実験で知る自然の世界」、○は「実験で知る自然環境と人間」、■は「体験で知る科学と技術」で提供されたことを表し、各枠の上段は前期、下段は後期である。横方向に2つの符号が並ぶものは2回(4コマ)に分けた内容を表す。タイトルが異なっても

後期											分担任教員
水野寿朗											三宅弘之
篠田圭司('16) 井上 淳('17)											山本和弘('18) 小原 顕('19)
2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	
○30 ●22	○30 ●15	●20	●20	●7	■18	■48	■36	■42	■13	■7	
●●	●●	●●									今吉洋一 (2004-2006), 小森洋平 (2010-2011), 竹内敦司 (2012-2013)
											大仁田義裕 (全), 瀧井高司 (全)
			●●	●●							橋本義武 (2008), 高橋 太 (2009), 秋吉宏尚 (2014-2015)
○	○										木野 茂 (1994-2003), 神田展行 (2004-2012)
●	●	●	●	●	■	■	■	■	■	■	相神外司郎 (1994-2001), 中野英一 (2002-2004), 杉崎 満 (2005), 鎌本勝一 (2006-2009), 矢野英雄 (2010-2012), 石川修六 (2013-2015), 井上 慎 (2016), 神田展行 (2017-2021)
●	●	●	●	●	■	■	■	■	■	■	松原 明 (1994-1998), 矢野英雄 (1999), 畑 徹 (2000-2004), 小原 顕 (2005-2013), 山本和弘 (2014-2021)
○	○	●	●								村田恵三 (全)
●	●			●	■	■	■	■			小原 顕 (全)
									■	■	小原 顕 (全)
						■	■	■	■	■	石井廣湖 (2004-2006), 吉野治一 (2016-2021)
											小栗 章 (全)
○	○	●	●	●	■	■					飯尾英夫 (1994-2012), 塩見大輔 (1999-2003), 品田哲郎 (2004-2017), [他不明あり 1994-1998]
○	○										臼杵克之助 (全), 飯尾英夫 (全)
○	○	●	●	●							田中礼二 (全)
●	●	●	●	●	■	■	■	■	■	■	紫田耕造 (1994-1998), 山下徹志 (1994-1998? 1999), 古市公彬 (1999), 小崎正敏 (2001, 2004後), 小嶋良種 (2004前), 広津 健 (2005前), 舘 祥光 (2005後, 2006, 2008-2017), 西村真洋 (2018-2021), 坂口和彦 (2018-2021), [他不明あり 1994-1999, 2001]
									■	■	三宅弘之 (全)
○	○	●			■	■	■	■	■	■	工位武治 (2002-2013), 中島信昭 (2006-2009, 2016-2017), 中沢 浩 (2018-2021)
○	○										田所 誠 (2004), 板崎真澄 (2006-2007), 中沢 浩 (2008-2009), 亀尾 肇 (2010-2012)
○	○										谷口 誠 (1994-1996, 2004-2005), 田中復雄 (1994-2000, 2006-2012), 藤田憲一 (1997-2000, 2004-2012)
●	●	●	●	●							神崎 護 (1994-1995, 1997-1998), 山倉拓夫 (1994-1995), 伊東 明 (1997-2015), 名波 哲 (2000-2015)
											平澤栄次 (1996, 2006-2008), 樽井 裕 (2001-2003, 2006-2008)
○	○										平澤栄次 (全), 宇高寛子 (2009-2010)
●	●	●	●	●	■	■	■	■	■	■	若林和幸 (全), 曾我康一 (全)
					■	■	■	■	■	■	若林和幸 (全), 曾我康一 (全)
○	○		●	●	■	■	■	■	■	■	金子洋之 (1999), 池西厚之 (1999), 水野寿朗 (2008-2012, 2014-2021)
○	○										沼田英治 (1994-1998, 2004-2009), 志賀向子 (1994-1998, 200-2001), 後藤徳介 (2004-2006, 2010-2012)
						■	■	■	■	■	大久保敦 (2016-2019), 塚腰 実 (2020-2021)
											八尾 昭 (1997-1998), 江崎洋一 (1997-1998), 塚腰 実 (2021)
○	○										前島 涉 (全), 吉川周作 (1994-1996), [他不明あり 1994-1995]
●	●	●	●	●	■	■	■				篠田圭司 (1997-1999, 2011-2016), 相川信之 (1997-1999), 古山勝彦 (2000-2002), 奥平敬元 (2000-2002, 2017-2018)
●	●	●	●	●	■	■	■	■	■	■	塩野清治 (1994-1996, 1999, 2001-2003), 升本潤二 (1995-1996, 2000, 2011-2013), 三田村宗樹 (1994-1996, 2001), 根本泰雄 (1999), 中川康一 (2000, 2004後), 塩野清治 (2001-2003), 原口 強 (2004前, 2006-2007), 根本達也 (2014-2016), 井上 淳 (2017-2018), 金 幸隆 (2019-2021)
○	○										原口 強 (2007-2010, 2012), 三田村宗樹 (2011)
											古山勝彦 (全)
									■	■	中村英人 (全)
											中屋-益田晴恵 (1994-2003, 2005-2010), 土江秀和 (1994-2001, 2004-2010), 山下徹志 (2002), 小崎正敏 (2003), 市村彰男 (2004), [他不明あり 1994-2001]

同系と思われるテーマは同じ列に並べたが、スペースの都合で担当教員の連続性で繋ぐなどやや異なるテーマを並べたところもある。本表は各年度の全学共通科目シラバス・履修案内、大阪市立大学基礎教育実験棟情報発信誌「BEEBER」、および科目の内部資料を元に作成した。